

# 中学校教育における音楽科教育活動に関する一考察

－地域の音楽文化との連携から－

## A Study on Music Education at the Junior High School Level, in Cooperation with the Regional Musical Culture

瀧明 知恵子  
Chieko Takiaki

キーワード： school education, music education, outreach, pupil guidance

### 1. はじめに

中学生は発達的には思春期の真只中であり、精神的葛藤や行動様式の獲得といった発達課題のある時期である。生徒たちが自ら課題を克服できるよう見守り、自信を持たせ、希望を持って学校生活を送れるよう、各学校では懸命な取り組みがなされているところである。

長年、音楽科教育を通して公立の中学校教育に携わってきた中で、中学校教育における音楽科の果たす役割の大切さを強く実感してきた。現代社会で、さまざまなストレスを抱える生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成に欠かせないものである。音楽活動を通して心を解放させ、鍛えることが一人一人の能力や個性を十分に発揮させることに繋がり、たくましく生きようとする心が育まれていく。特に思春期に心を鍛え育てることは、人間形成において大切なことであり、その心を育てることに音楽の持っている力が大きく関わっている。

現行の学習指導要領において、音楽科の授業時数はこれまで通りの時間数を確保している。しかしながら中学校では音楽科が授業の補充や発展的な内容を展開していた個人選択授業が無くなり、総合的な学習の時間は小・中学校とも減少し、実質的には音楽教育の場は減少していると言える。

限られた授業時間の中で、音楽活動をより充実・発展させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを行っていきたいと考える。地域のホール・専門家・学校がつながりあうことで、音楽科教育はより豊かになる。音楽を通して心を揺さぶり、人としてもっとも大切な心の育みを行っていくために、学校と地域の音楽文化とのつながりを考察する。

### 2. 中学校教育の状況

#### (1) 生徒の現況

近年、中学校現場ではいじめ、不登校、学力低下、暴力行為、IT機器に関わる問題等が、ここ何年も取り上げられ社会問題ともなっている。その原因と背景は複雑になってきており、ますます深刻化し、これまでの教育観を大きくゆるがせていると言える。増加する不登校生の状況は長期化し、青年のひきこもりの状況にもおよんでいる。不登校の問題と表裏一体ともいえるのは「いじめ」の問題である。目にみえにくい「いじめ」の問題の発見は困難

である上に、生徒同士の対人関係は変化しやすく、まわりの大人（教師・保護者等）から見えにくくなっている。学校や家庭、友だち関係の中でのストレスや、不満・不安が「いじめ」という問題に発展し、不登校の増加に拍車をかけているとも言える。

文部科学省が公表した2013年度「児童生徒の問題行動等、生徒指導上の諸問題に関する調査」<sup>1)</sup>によると

- 1) 小・中・高等学校における、暴力行為の発生件数は59,345件であり、児童生徒1千人当たりの発生件数は4.3件である。高等学校通信制課程における発生件数を除くと59,168件（前年度55,836件）であり、児童生徒1千人当たりの発生件数は4.4件（前年度4.1件）である。
- 2) 小・中・高・特別支援学校における、いじめの認知件数は185,860件であり、児童生徒1千人当たりの認知件数は13.4件である。  
高等学校通信制課程における認知件数を除くと185,767件（前年度198,109件）であり、児童生徒1千人当たりの認知件数は13.6件（前年度14.3件）である。
- 3) 小・中学校における、不登校児童生徒数は119,617人（前年度112,689人）であり、不登校児童生徒の割合は1.17%（前年度1.09%）である。
- 4) 高等学校における、不登校生徒数は55,657人（前年度57,664人）であり、不登校生徒の割合は1.67%（前年度1.72%）である。
- 5) 高等学校における、中途退学者数は59,742人であり、中途退学者の割合は1.7%である。高等学校通信制課程における中途退学者数を除くと50,124人（前年度51,781人）であり、中途退学者の割合は1.5%（前年度1.5%）である。
- 6) 小・中・高等学校から報告のあった自殺した児童生徒数は240人である。高等学校通信制課程に在籍していた生徒数を除くと213人（前年度195人）である。

また、「調査結果の要旨」の中では、以下のことが読み取れる。

＜暴力行為＞については、全体的に前年度より増加しており、高等学校では減少しているが、中学校は2,028件増加し、小学校でも増加があり暴力行為が低年齢化してきていると言える。特に「対教師暴力」「生徒間暴力」の項目に増加が見られる。また、暴力行為が発生した学校は前年度より、257校増加しており、学校外での発生は216校減少している結果は気になるところである。

＜いじめの状況＞については2013年度から高等学校通信制課程を調査対象に含めているため、前年度との単純な比較はできない。高等学校及び合計に係る前年度の数値は参考として記載されている。小学校は1,421件増加しており、中学校では8,386件減少している。中学校ではやや減少しているが全体的には高い数字である。＜いじめを認知した学校数＞は前年度より、2,269校減少しているが、全学校の半数を占める状況である。

＜不登校の状況＞で注目すべき点は、小学校では6年生が最も多く、8,010人であり、中学1年生になると激増し22,390人であり、3年生になると38,786人となっている。かなり高い件数であり、中学校の抱える大きな課題となっている。その要因・背景にはさまざまなものが考えられ、中でも上位に「不安など情緒的混乱28.1%」「無気力25.6%」「いじめを除く友人関係をめぐる問題15.0%」などが挙げられている。

学校生活の中で心の豊かさや情緒の豊かさを育む教育活動を進めていかねばと考える。

## （２）中学校学習指導要領における音楽科教育

現行学習指導要領<sup>2)</sup>では「生きる力」を理念として継承し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育成するとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うために言語活動を充実することなどをねらいとしている。そういった中で、思考力・判断力・表現力を育てていくためには、学校のエデュケーションの中で音楽教育を充実させていくことは大切だと考える。健やかな身体や豊かな心を育むというねらいの下、子どもの全人格的な人間性を育成していくために、これまでの授業を見直し、音楽科教育をより充実させていかねばと考える。現行学習指導要領においては授業時数の増加や総合的な学習の縮減、選択教科の標準授業時数の枠外実施など必修教科を中心としたエデュケーションの編成を特色とし、生徒の確かな学力の向上を大きなねらいとしている。

中学校音楽科では表現の内容を「歌唱」「器楽」「音楽づくり・創作」で構成し、我が国や郷土の伝統音楽に関する「歌唱の共通教材の充実」、音楽科の学習に即した言葉の活用や〔共通事項〕を踏まえた指導が求められている。

## 3. 地域の音楽文化との連携

### （１）地域の音楽活動

学校生活において音楽教育が、心の教育に果たす役割は大きい。音楽活動をより充実・発展させていくために学校だけでは実現しない音楽教育を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを行っていききたい。

地域に目を向けると、文化施設や音楽の専門家、和楽器の伝承グループ、大学など、豊かな文化が存在している。そういった地域のホールや専門家・大学等と連携し合うことで、音楽教育はより豊かになる。外部の専門家や地域の文化を担う方々が学校に入り、授業を共に行うという取り組みを「アウトリーチ」を活用した授業と呼んでいる。

音楽分野での連携を具体的にあげると、学校や福祉施設・医療施設等へ出向いての「コンサート」や「ワークショップ」、音楽や音楽教育に関する「セミナー」や「シンポジウム」など、多様なスタイルで実施されている。アウトリーチを供給する側は個人の音楽家やNPO団体、地域の文化団体、公立文化ホール・民間ホール、大学などである。活動の目的は音楽活動の広報や、社会貢献、団体や施設のアピールや存在意義を知らせるなどである。

アウトリーチについて、文部科学省の「2011年公立小・中学校におけるエデュケーションの編成・実施状況調査」<sup>3)</sup>によると、小学校の87.3%中学校の77.5%が、総合的な学習の時間などにおいて外部の人材を計画的に組み入れた授業を展開している。その中でも、音楽科教育では積極的に教育実践が行われている。林 睦の「学校教育における音楽科活用の調査研究」では全国の69.6%の学校で、外部の音楽科を招いた実践が行われていたことを示している。<sup>4)</sup> 活動内容としては、コンサート形式だけでなく、参加者が楽器等の演奏を体験したり、音楽科と参加者が対話したり、共演したりといった形がある。また、1回限りでなく、計画的に継続して行う形もある。

### （２）音楽科教育とアウトリーチ

「アウトリーチ (outreach)」という言葉は英語で「手を伸ばすこと、差し伸べること」という意味を持つ。

学校教育にアウトリーチが普及したのは、1998年の学習指導要領である。「総合的な学習の時間」が新設され、これまで各学校において、様々な形態でなされていた取り組みが、より発展した形で、実施されるようになってきたのである。また、音楽科では和楽器が導入されたことが契機となり、外部の専門家を招聘した授業実践が定着するようになったのである。「総合的な学習の時間」では、「教科横断型学習」、「合科学習」といった教科の内容を充実・発展させて、教科の枠を超えた取り組みとして、盛んに実践研究されるようになり、その中の一つがアウト

リーチを活用した取り組みである。

そういった中で、外部の音楽専門家や地域の文化を担う方々が、学校に入り、授業を共に行うという取り組みが行われやすくなってきたのである。

中学校音楽科では特に和楽器の学習の際、外部の専門家と共に授業を実施する学校が増えてきている。一方、学校が外部の人材の協力を得ながら授業を行うようになってきたことで、邦楽の演奏家や団体は、邦楽の保存と発展のため学校教育における邦楽の普及に力を入れている。「総合的な学習の時間」や「音楽の時間」に「音楽専門家」や「地域の文化を担う人」といった外部の人材を招くことが広まってきている中で、1980年から1990年にかけて各地の文化施設が増加し、1990年から10年間に、約1500の公共的文化施設が開館しているのである。<sup>5)</sup> アウトリーチはこういった文化施設の存在を知らしめ、地域の文化活性化や、聴衆の拡大をねらいとして、活動を広げた面もある。

以下に、筆者が、これまで実践研究をおこなってきたアウトリーチを活用した授業について紹介する。

## 4. 音楽科教育におけるアウトリーチの実践

### (1) 地域の大学との連携

#### ①授業実践の経緯

本実践は、2005年、兵庫県西宮市の公立中学校において中学校1年生（1組36名・2組38名）・2年生（1組33名・2組34名）の音楽科授業において実施された。

地域の大学（音楽学部）の学生を招き、鑑賞の授業を音楽教諭と共に実践する。神戸女学院大学音楽学部では2001年度から、学部3年生に「アウトリーチ講義」、2002年度から、学部4年生に「アウトリーチ実習」を開講している。

筆者は教頭としてコーディネーターの役割を務める。事前に大学の音楽学部教授と授業の打ち合わせを行う。題材の決定、題材となる楽曲と共に、作曲者の他の作品を含めた演奏の依頼、楽曲や作曲者についての説明資料準備の依頼等、を行う。また、学校の状況として、現在の授業内容、生徒の音楽的力量、生徒の状況、今回の授業でのねらい・内容等を伝え、意見交流、共通理解を行う。

音楽担当教諭には打ち合わせ内容を伝え、本授業がより効果的に行えるよう、事前指導を依頼する。本授業の指導案はコーディネーターが作成する。

#### ②授業の概要

##### 2年「月の光」の鑑賞

・音楽教諭による事前指導、次回に学習する作曲者や楽曲について調べてこさせる。（1時間）

##### \*ゲストティーチャー（大学生2名）との授業実践

・ゲストティーチャー（大学生2名）の紹介

・楽曲についてや作曲家について、生徒が調べてきたことの発表、補足をしながら、概要の理解をさせる。

・学生による、ドビュッシー「月の光」の演奏

・感想の交流

・ドビュッシーについて、楽曲についてプリントも使用しより深く学習する。

・学生によるドビュッシーの他の作品の演奏（ピアノ演奏）

・感想交流、ノートのとまとめ。

・質問コーナー（ピアノを始めたきっかけ、なぜ音楽の道に進んだか、など進路についてや、音楽の学び方、練習の仕方についてなど、予想以上に質問が多く、交流は深まった。）

＊＊１年は「魔王」の鑑賞を行う。

## （２）演奏家との連携

### ①授業実践の経緯

本実践は、2008年・2009年、兵庫県西宮市の公立中学校において中学校３年生（20～25名）の選択授業（前期）において実施した。

この授業では、「地域の文化とつながる・日本の音楽に親しむ」をテーマに、地域の箏演奏家と連携した授業を試みた。まず、箏演奏家と担当教師が打ち合わせを行い、前期15時間分の計画を共同制作し共通理解した。計画については担当教師が主導するが、より、効果的な授業にするため、箏演奏家の意見を大いに参考にした。箏の楽器説明や、奏法、歴史、楽曲については、演奏家に行っていただき、担当教師は、生徒が興味関心を持って聴くように事前指導を行った。導入として、箏について学び、箏の調べを鑑賞した。その後、リコーダーのアンサンブルの練習を行い、リコーダーアンサンブルと箏演奏のコラボレーションを行った。箏の演奏を間近に聴きながらリコーダーアンサンブルがとけ込み、和の音楽にひたるひとときとなる。

### ②授業の概要（前期15時間分）

＜選択授業（前期）の流れ＞

・選択授業のねらい・内容の理解（１時間）

地域の箏演奏家についての話

・箏演奏家紹介（１時間）

箏を通して、日本の美しい楽曲に触れる

・リコーダーの練習（５時間）

パート分け、パートリーダー・独奏者決定、練習

・リコーダーアンサンブルの練習（３時間）

・リコーダーアンサンブルと箏のコラボレーション（２時間）

・リコーダーアンサンブルと箏のコラボレーション リハーサル（１時間）

・文化発表会にて発表（地域の公立ホール）

・取り組みの成果と課題についての意見交流（１時間）

箏演奏家へのお礼の手紙作成

### ③教材について

教材として2008年は、日本のなつかしい童謡・唱歌から「さくらさくら」・「浜辺の歌」・「まつり」・「荒城の月」などを選曲する。また、2009年は、箏と尺八の名曲「春の海」の演奏に挑戦する。

・「さくらさくら」・「浜辺の歌」・「まつり」・「荒城の月」

ソプラニーノリコーダー・ソプラノリコーダー・アルトリコーダー・テナーリコーダーでの合奏、と琴の伴奏



（2名）と独奏、曲に応じて和太鼓演奏参加

・「春の海」

ソプラノリコーダー 一部独奏、ソプラノリコーダー・アルトリコーダー・テナーリコーダーでの3部合奏、と  
琴の伴奏（2名）と独奏、マリンバ

箏の演奏を間近に聴きながらリコーダーアンサンブルがとけ込み、和の音楽にひたるひとときとなる。

### （3）地域の和楽器伝承団体との連携

前記の実践の他にも、これまで地域の様々な文化とつながり、授業実践を行ってきている。

#### ①箏の奏法を学ぶ

筆者が交流人事で宝塚に勤務した際の実践報告である。宝塚市の音楽研究会は地域の邦楽研究団体（生田流）と契約し、数校の中学校が邦楽研究団体による「琴の奏法の学習」を取り入れている。下記は、ある公立中学校2年生5クラスの取り組みである。

邦楽研究団体は、2日に分けて、7クラスの授業補助を行う。大変意欲的で、前日、クラス生徒数の約半分の琴を搬入し、調弦をしておく。当日は授業前にも調整する。箏は2名に1台あるため、交代で実習を楽しむ。（全2時間）

- ・学校における事前指導
- ・ゲストティーチャー紹介
- ・模範演奏、感想・意見交流
- ・箏の楽器説明、基本的な奏法の実演・奏法
- ・ゲストティーチャーとの共演

#### ②和太鼓に親しむ

西宮市では、和太鼓フルセットを市内で4セット購入し、拠点校に配置し、近くの数校が時期をずらして活用するようになっている。地域の和太鼓演奏グループとの連携により、「和太鼓に親しむ・奏法を学ぶ」を実施している学校もある。

- ・学校における事前指導
- ・ゲストティーチャー紹介
- ・模範演奏、感想・意見交流
- ・和太鼓の種類・各太鼓の基本的な奏法についての説明
- ・基本的な奏法の実演とともに、体験学習
- ・グループに分かれ、基本奏法の練習
- ・ゲストティーチャーとの共演

実演ではその迫力に圧倒され、大いに熱が入る練習となる。

### （4）地域の文化施設との連携

兵庫県では、県内の中学1年生にプロによる生の音楽を本格的なホールで聴かせようと、「わくわくオーケストラ」を実施している。生徒たちにとって、本格的なホールでの音楽体験は興味関心を高める良い機会となっている。

4 演目のプログラムからなり、コンサートでは、楽器の紹介やどのようにして音を出しているかなどの実演や、クラシックコンサートのルールやマナーについても学ぶ。楽曲は、交響曲、序曲、交響詩など、その作品に込められた想いや時代背景などの説明もあり、オーケストラの世界について深く知る機会となる。

その他、ホールからの出前演奏「オーケストラの楽器に親しむ」「管弦楽コンサート」「ミュージカル」などの取り組みがある。<sup>6)</sup>

## 5. 考察と今後の課題

中学校教育における地域の音楽文化との連携では、「生の音楽に接することの少ない子どもたちに、芸術活動を届ける」に留まらず、音楽専門家や公共施設と連携し「学校教育をより質の高い学びにしていける」積極的な関わりのある活動の場にしていくことが望まれる。

アウトリーチの授業実践の中で、ゲストティーチャーを迎えることで、問題点や課題が残ったこととして、「ゲストティーチャーが教育現場に慣れておられないため、生徒の関わり等で授業がうまく進まない」「時間配分等で、うまくいかない」「話が専門的になりがち」「ゲストティーチャーと指導のねらいがくいちがう」などが挙げられる。せっかく労力と時間をかけて計画してきたにも関わらず、思うような効果が得られない時もあるのである。そういったことを防いでいくためにも十分な打ち合わせが必要である。

中学校現場には、ゆとりがなく、十分な打ち合わせ時間を取りづらい状況がある。一方、供給する側は、専門性にすぐれており、芸術活動の普及に力を入れたいと考えている。また、文化ホールの存在意義をアピール、伝統芸能の引き継ぎなど、大きな使命を担っている。しかしながら、学校現場に慣れていないため、生徒の接し方、教材や内容の精選など課題はある。そういった中で、質の高い授業を成立させていくために、コーディネーターの存在が大事になってくる。学校教育のカリキュラム上の位置づけ（各教科、特別活動、総合的な学習の時間）や、授業との関連性（内容と目標）など、限られた授業時間を有効に使っていけるよう、綿密な計画が必要である。かつて、教頭時代、コーディネーターとして活動したが、校務分掌上で、例えば地域連携といった項目で、コーディネーターを入れることができればと考える。また、供給する側にコーディネーターとして活動する人材があれば、より密度の濃い打ち合わせができると考える。

地域の音楽文化との連携は、生徒たちにとって、いかに貴重な機会となっているかは、その後の感想文、交流での意見の数々を聞けば、実感できることである。

生徒とゲストティーチャーとの交流の中で、「言葉や態度に積極性がでてきている。」「学生が関わることは音楽の授業だけでなく、生活面においても、生徒の成長に影響している。」や、「影響を受けた生徒が進学先で吹奏楽やオーケストラに関わる活動を行っているという場合もある」との報告を聞いている。大学において、「音楽によるアウトリーチ」を教授する津上は「学生は人間と音楽との関係を根底から考え直す機会を得る。自分にとって、子どもたちにとって、社会の人々にとって音楽とは何か、どのような力と可能性を持っているのかを深く考えることになる。今後、音楽系大学の基礎教育としてアウトリーチ教育を拡充していくことが、大学にとっても、喫緊の課題であろう」<sup>7)</sup>と述べている。

これまでの実践からアウトリーチにおける授業を、より良いものとしていくために、学校側の教師がゲストティーチャーと生徒をつなぐ役割を十分に果たすことが大事であり、授業内容、時間配分、楽器等への配慮、音楽家との意見交流など、学校と音楽家がしっかりと打ち合わせができる体制づくりが必要であると考えられる。そのためには、学校と地域の文化活動が連携できる体制づくりが必要となってくる。大学においては、教育課程に位置づけられる

ことで、活動内容はより充実したものとなるであろう。

一方、アウトリーチを実施する際、学校側が直面する大きな課題は、一部の教師以外は、アウトリーチの内容や効果に関する理解が不足していることである。日々、学び続ける教師でありながら、新しい動きや試みに興味関心を持って吸収し、取り入れようとする意識は、高いとはいえない。それは現場の学習指導、生活指導を始めとする多種多様な活動に忙殺され、ゆとりが持てない状況がその要因であるが、より質の高い授業を実現させていくことは、学校教育における好循環（生徒が興味・関心を持つ授業づくり。集中する授業・・・日頃の学校生活が落ち着き、より意欲的に学ぶ）を作り出していくはずである。そのように考える時、一部の者が専門分野だけで進めるのではなく、学校全体の教育計画の中に年度当初から、年間を見通し、学年の成長に応じて組み入れていくことが大事であろう。音楽科をはじめとする芸術活動から取り入れ、他教科、道徳、総合的な学習の時間も視野に入れ、広がっていくことが望まれる。

さらに、1回限りで終わってしまうのでは無く、継続して行っていけるような計画が必要である。単発的なアウトリーチと継続的なものとの比較を「(財) 地域創造」が行っており、「継続的長期的な実施がアウトリーチの効果を高める」という結果がでている。<sup>8)</sup> 継続性を持たせた複数回のプログラムを計画し、学校全体の共通理解のもと、進めていきたいものである。

#### アンケート調査（児童・生徒対象）

＜図表10 このような時間を続けると、どのようになると思いますか。（複数回答）＞

- ・ いままでよりも、授業中に質問や意見を言うのが恥ずかしくなくなると思う 22.2%
- ・ いままでよりも、自分のすることや言うことに自信をもてると思う 35.7%
- ・ いままでよりも、からだを動かすのが楽しくなると思う 52.1%
- ・ いままでよりも、音楽や図画工作の時間が好きになると思う 49.5%
- ・ いままでよりも、ほかの人に言葉で気持ちを伝えられるようになると思う 25.7%
- ・ 無回答 3.1%

（財）地域創造「文化・芸術による地域政策に関する調査研究 報告書」より

## 6. おわりに

中学校教育で実施されるアウトリーチは生徒たちに不足しがちなコミュニケーション能力や表現力創造力や創造性を養う効果があるのである。アウトリーチの普及に大きな役割を果たした「(財) 地域創造」がアウトリーチを実施した学校の教師を対象にアンケート調査を行っている。<sup>9)</sup> 教員対象の調査によると、アウトリーチは子どもたちの感受性や表現力、創造力、コミュニケーション能力、創造力の育成に効果がある、と多くの教師が回答している。

また、海外事例調査（イギリス・フランス・ドイツ・アメリカ）も実施されている。約30の芸術機関や文化施設、芸術団体などを調査し、報告書を出している。その中で、教育と連携したプログラムの効果、身に付けられる能力を下記の4つに整理している。

- ① 自信の回復、自己肯定感
- ② 創造力、想像力、批評的思考力
- ③ 社会性、協調性、グループワーク（の能力）、責任感



④基礎学力の向上、他の教科との連携

アンケート調査（教員対象）図表3

＜アーティストが学校に出向いて行うような授業は、特に子どもたちの  
どのような能力や心を育むことに効果があると思われますか。（複数回答）＞

- ・自分の考えや気持ちを表現する力（表現力）60.3%
- ・人と対話したり接する力（コミュニケーション能力）46.7%
- ・新しいアイデアや物事を生み出す力（創造力）41.0%
- ・目に見えない事象をイメージする力（想像力）50.2%
- ・素直に感動する心（感受性）82.1%
- ・一つの目標に向かって集中する力（集中力）18.3%
- ・集団で一つのことに取り組む力（協調性）28.4%
- ・他人の気持ちに共感する力（共感力）26.6%
- ・言葉や文章で他者に伝える力（言語力）11.4%

（財）地域創造「文化・芸術による地域政策に関する調査研究 報告書」より

中学校時代は自我に目覚め、心も体も急激に発達し、芸術に対する興味も高まる時期である。現代社会において、さまざまなストレスを抱える生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。リードは、芸術は、教育の基礎たるべしと述べ<sup>10)</sup>、マーセルは、人間が安定した感情を持ち幸福な生活ができるようになるには、子どもの時から知的経験に匹敵するだけの感情経験を与えること、と論じている。<sup>11)</sup>

音楽を通して心を揺さぶり、人としてもっとも大切な心の育みを行っていくために、地域の音楽文化とつながっていくことは大切である。アウトリーチを導入することにより、学校では新たな学びのスタイルが生まれた。これまでは、担当教諭が児童生徒を指導支援するという授業に、ゲストティーチャー（音楽家）が第3者として入り、授業を展開することとなったのである。そのため担当教諭・ゲストティーチャー（音楽家）・児童生徒がいかにコラボレーションするかが鍵となる。専門家からの「こんなことが提供できます」「こんな力をつけることができます」といった提案を受けたり、学校は生徒の様子や、「今、こんな授業をしています、こういったことをして欲しい」といった情報を伝える。学校の音楽教育に地域の音楽文化を生かすためには、連携できる組織づくりも必要である。教師は良きコーディネーターとなっていく必要がある。つながりを深めていくことで、より豊かな音楽教育を目指すことができる。

限られた授業時数の中で、学校ではこれまでの授業を見直し、新しい課題についても積極的に授業に取り入れていく必要がある。今後、地域の小・中学校の9年間の連続した取り組みも意識し、アウトリーチを活用し外部人材の導入を視野に入れながら、教育課程における年間計画を創意工夫していかなければと考える。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省「児童生徒の問題行動等、生徒指導上の諸問題に関する調査」文部科学省 2013
- 2) 文部科学省「中学校学習指導要領」2008  
文部科学省「中学校学習指導要領解説 音楽編」2008

- 3) 文部科学省「公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査」2011
- 4) 林 睦「学校教育における音楽科活用の調査研究」『文化経済学』12号 P.85-90
- 5) NPO法人アートNPOリンクによる実態調査「地域創造レター」No.166 P.10
- 6) 瀧明知恵子「新学習指導要領における音楽科教育～音楽教育に献身してきて思うこと～」教育フォーラム特集 50号特集＜やる気＞を引き出し育てる 人間教育研究協議会 金子書房 2012
- 7) 津上智美「神戸女学院大学のアウトリーチ教育と3大学連携：『コミュニケーションとしての音楽』再発見の試み」『音楽教育実践ジャーナル』2013,P.36
- 8) (財) 地域創造「文化・芸術による地域政策に関する調査研究 報告書」2010 P.21
- 9) (財) 地域創造「文化・芸術による地域政策に関する調査研究 報告書」2010 P.9
- 10) Read,H., Education Through Art,Faber and Faber, 1943 (植村鷹千代・北沢孝策訳「芸術による教育」美術出版社1959)
- 11) Muesell,J.L.,Human Values in Music Education,Silver,Burdett and Cmpany, 1934 (美田節子訳「音楽教育と人間形成」音楽之友社、1967)